

「エレクトラ」(ソポクレス)

この作品の題材は、本欄で先に紹介したアイスキュロスの「オレスティア」三部作の第二部「コエーポロイ」と同じく、父アガ멤ノーンの仇を討つべくオレステースが歸國して、母クリュタイメーストラとその情夫アイギストスを殺して復讐ふくしゅうを遂げる話だが、「エレクトラ」なる題名が示す通り、主人公はアガ멤ノーンの娘エレクトラで、彼女は弟のオレステースと共に復讐の道を突き進む。粗筋はかうだ。

父の死後、エレクトラは父の復讐と弟の成長とのみを望みに生きてゐたが、母と情夫はそんな彼女を憎んで地下に閉ぢ込め奴隷同然に虐待する。だが、「氣の毒な死様をした親のことを忘れるのは、愚か者」だけだと信ずるエレクトラは、「どんなに怖ろしい目に遭はうとも、生命のある限りは」父の非業の死を嘆き、仇敵きうてきに「罪を償ふ苦しみを與へ」てやると心に固く誓つてゐる。一方、妹のクリュソテミスは姉の「氣持の激しすぎる」のを懸念して、自分も仇は憎いし、お姉様の考へは「本當に正しい」とは思ふけれど、「人間並の生活をしようと思へば、萬事目上の人の言付け通りするほかはない」のだから、「強い者にはゆづる方がいい」、さういふ「分別」ある生き方をお父様だつて「きつと

有して下さる」筈だと云つて姉を説得しようとする。すると、エレクトラはかう云つて妹を詰る、「あなたには憎い憎いと言つてゐるけれどそれは言葉の上だけで、實際にはお父様を殺した犯人たちと一緒にゐる」だけの事、「いまあなたがぬくぬくと楽しんでゐるやうなよい目をわたしにも遣はしてくれらうといつたつて、わたしはあんなひとたちに頭を下げるものですか」。

そんな或日、異國にゐるオレステースの死の報知がクリュタイメーストラの許に届く。戦車競技で疾走する戦車から轉落して横死を遂げたといふのだが、實はこれはオレステースが母達に警戒されずに接近すべく配下に届けさせた虚報であつた。しかしそれを聞いて、オレステースの報復を恐れるクリュタイメーストラは安堵し、エレクトラは絶望する。そして、「たつた一つの望み」も失くした今となつては妹と二人だけでも復讐を執行しようとするクリュソテミスの説得するが、斷はれる。かくなる上は一人でやるしかない、と彼女が臍を固めた處に、オレステースが出現して、首尾良く復讐を遂げるのだが、母の最期の悲鳴を聞いてエレクトラは叫ぶ、「斬つておやり、力があつたらもう一太刀」。

エレクトラの人間像については、その憎惡の激しさに辟易してか、まるで復讐鬼だとか、實の母に冷酷過ぎるとかいふ意見も少くはないのだが、仇に對して何處迄も無慈悲な態度を示すのはエレクトラだけではない。オレステースにしても、俺は「どうしてもお前に辛い死方」をさせなくては氣が濟まぬと云つてアイギストスを殺すのであつて、ギリシヤ悲劇のかくの如き情け容赦無き結末は、「和

解の儀式」たる歌舞伎の如きを生んだ日本文化とは凡そ異質なものである。「歌舞伎の場合、悲劇として何が吾々を感動させるかと言ふと、それは對立する二つの力の和解の儀式、許し合ひ、見逃し」なのだと福田恆存は書いてゐる。

しかもアリストテレスによれば、「私は人間のあるべき姿を描いた」とソポクレスは語つたといふ。人として全う足り得る爲にはクリュソテミスの「分別」では足りない、エレクトラの様に、「本當に正しい」と信ずる事の爲に時に「分別」をも捨てられねばならぬとソポクレスは信じた譯だが、正義を全うすべく「人間のあるべき姿」に飽迄固執するのもギリシャ以來の西洋の頗る強靱な傳統である。

(松平千秋譯、ギリシヤ悲劇全集Ⅱ、人文書院)